

フィールド風

宮田守男

(現場)からの

現在の土地利用の美態は、長年の歴史の積み重ねにより現在に至っている。限りある土地で、どれだけ収穫物を得るのかを目的に開発が積み重ねられ

てきた。現況の土地利用は、白馬村を例に取れば農業では、コメ単作地域であるため水田利用に可能な耕地は、水田化が進められてきた。しかし観光業が地域の基幹産業になった時、地域の土地利用が旧前のままで良いのかとの声を聞く機会が多くなってきた。耕作地に適さないと判断された土地は、開発により別荘地などの造成が進み、現在では、新たに建物を建築したいとしても購入希望者に対応できないとの声が聞こえてくる。

地域全体の里山景観はこの為か、これまで保養地的景観を呈していた。しかし既存営業施設や、新規建設予定の大型宿泊施設の雇用も地域内就業可能者が確保出来ず、村外からの人材確保の為か、従業員用宿舎建設が、お客様から見える位置

地域内の土地利用計画は重要な課題だ

に建てられる状況と耕地面積は、耕作不可能者が多くなる。反面、農地が多くの荒廃地を誕生させているし、高齢化、後継者の不在、大型機械による耕作省力化を目的に、圃場整備への取り組みも各地域で進められているが、将来

の地域の存続を考察した時、現状の土地利用を継続するべきなのだろうか。一つの例だが、白馬村新田集落の南に位置する水田地帯も現在圃場整備構想が地域で取り進められている。だが

増え、将来予想される人口減少時代でも、多くの営業形態の持続が可能になると考えられる。また温暖化対応として、優良企業や、学校教育施設の誘致も不可能では無いだろう。今後求められる客層を想定した施設内容にすれば、新たな景観を生み出すのだろう。温暖化に伴い、屋外競技を体験する場所は、魅力的な箇所になるはずだ。

「白馬も熱い」と否定せず、冬期間の降雪をどの様な利用形態にするかで魅力的な効果を生む可能性を否定してはいけない。大きな資本が、多額な費用を投じなくても、開発できる手法は数多くあるはずだ。将来を見据えて多くを語ろうではないか。(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)



この眺望は、地域の財産だ。どんな未来が描かれるか楽しみだ。